

平成 21 年第 1 回一都三県サバ漁海況検討会

平成 21 年 1 月 8, 9 日

参画機関：東京都島しょ農林水産総合センター・神奈川県水産技術センター・
静岡県水産技術研究所・千葉県水産総合研究センター

協力機関：中央水産研究所・東北区水産研究所八戸支所・漁業情報サービス
センター

1 予測

(1) 海況

【予測 (2009 年 1～6 月)】

黒潮は、C 型基調で推移する。

現在の極端な S 字状の北上流路が、2 月初めごろまで継続する。その後、安定した形の C 型に戻り、4～5 月に一時的に B 型流路となる。

野島沖では、接岸傾向が続き、流路の変動の前後に離岸する。

伊豆諸島北部海域は、「低め」基調だが、暖水波及時に「高め」～「きわめて高め」となる。近年 C 型でも、暖水が波及することがある。

【説明】

現在、黒潮は極端な S 字状の北上流路を示す C 型であるが、1 月 3 日更新の FRA-JCOPE では、2 月初め頃までは、この流路が継続すると予測されている。

現在の、極端な S 字状の北上流路は、房総沖合いの冷水渦が西進して、影響を受けているものと思われる。その後、通常の C 型流路に戻るとと思われる。

その後は、都井岬で 2～3 月頃に一時的に離岸傾向になると予測されているため、その 2～3 か月後の 4～5 月に小蛇行は伊豆諸島に到達して、一時 B 型となり、その後 C 型になる。

最近 C 型時に伊豆諸島を S 字状に北上して、房総沿岸に接岸する事例が多く観察される。現在もこの流型であり、三宅島付近を中心に、伊豆諸島北部に暖水が波及している (1 月 7 日大室出しで 17℃)。この海況は、1 か月ほどは継続すると考えられることから、暖水が波及しやすい状況が続く。

その後、流路に変動があること、4～5 月に一時的に B 型になること、また潮岬を数日単位の小さな冷水がたびたび通過している (直近では 12 月 29 日) ことから、その際の黒潮の流路変動に応じて、暖水が波及すると考えられる。

(2) 漁況 ※年齢は 2009 年：魚体の大きさは尾叉長

①マサバ

【予測 (2009 年 1～6 月)】

(ア) 来遊量

マサバ 1 歳魚は前年を下回る。2 歳魚は前年を上回る。3 歳魚は前年を下回る。4 歳以上は少ない。マサバとしては前年を下回る。

(イ) 漁期・漁場

マサバ主体の漁場が形成される場合は伊豆諸島北部海域となる。

(ウ) 魚体

マサバは 28～32cm (2 歳魚) が主体。

【説明】

マサバ太平洋系群の資源量は、加入水準の高い 2004、2007 年級群の発生により資源量は増加傾向にあるが、依然低水準である。2004 年級群 (5 歳魚、推定加入尾数 37 億尾) はこれまでの漁獲の主体となったが、残存資源量は減少している。2005、2006 年級群 (4 歳魚 (同 5 億尾)、3 歳魚 (同 1.7 億尾)) の加入量は低水準であり、その残存資源量は少ない。2007 年級群 (2 歳魚) は、本年 7 月時点の加入量が 24 億尾と評価され、残存資源量も高水準であると考えられている。2008 年級群 (1 歳魚) の加入量は、各種調査結果から最低ではないものの低水準である。

1 歳魚 (2008 年級群) の加入量水準は低く、来遊量は多かった前年を大きく下回ると考えられる。2 歳魚 (2007 年級群) の加入量水準は卓越年級群である 2004 年級群に準ずる高い水準と考えられ、来遊量は少なかった前年を大きく上回る。3 歳魚 (2006 年級群) および 4 歳魚 (2005 年級群) は資源量が少なく、来遊量は前年を大きく下回る。5 歳魚 (2004 年級群) は卓越年級群であったが、残存資源量は少ないと考えられる。なお、たもすくい漁業の対象となるのは、2 歳魚の一部と 3 歳以上である。これらのことから、今期の漁獲の主体は 2007 年級群と考えられる。

黒潮流路がマサバの南下回遊に不利な C 型で経過すると予測されていることから、多くは期待できない。しかし、近年のマサバ主体の漁場形成の状況から暖水が波及した場合、伊豆諸島北部海域に漁場が形成される。

【マサバ資源管理】

親魚量は 2004 年級群の高い加入により増加したが、続く 2005、2006 年級群の加入量水準は低く、2004 年級群の残存資源尾数も減少している。2007 年級群は 2004 年級群に準ずる加入水準の高い年級であると考えられる。今期は 2 歳魚であり、産卵への寄与はまだ低いが、今後のマサバ親魚資源の主体となる重要な年級群である。親魚量の減少を一時的なものにとどめ、マサバ資源の回復を図るためには、2007 年級群の保護が必要である。

②ゴマサバ

【予測 (2009 年 1～6 月)】

(ア) 来遊量

ゴマサバ 1 歳魚は高水準であった前年を下回る。2 歳魚は前年を上回る。3 歳以上は少

ない。ゴマサバとしては高水準であった前年並み。

(イ) 漁期・漁場

ゴマサバは期を通じて三宅島周辺海域が主漁場となる。

(ウ) 魚体

ゴマサバは 29～34cm (2 歳魚) が主体。

【説明】

ゴマサバ太平洋系群は、資源量は 2004 年級群 (5 歳魚、推定加入尾数 30 億尾) の高い加入量水準によって増加し、2005 年にピークに達した後、2005、2006 年級群 (4 歳魚 (同 4 億尾)、3 歳魚 (同 2 億尾)) の加入量水準が低いために減少してきているが依然高水準にある。2007 年級群 (2 歳魚) の加入量は、近年の平均的な水準の 7 億尾を上回ると判断されている。2008 年級群 (1 歳魚) の加入量は、各種調査結果から近年の平均を下回る低水準である。

1 歳魚 (2008 年級群) はこれまで得られている情報から近年の平均を下回る加入量水準とみられ、来遊量は前年を下回る。2 歳魚 (2007 年級群) はこれまで得られている情報から 2004 年級群に及ばないが 2005、2006 年級群を上回る加入量水準と推定され、来遊量は低水準であった前年を上回る。3 歳 (2006 年級群) 以上は、資源量が少なく、来遊量は前年を下回る。これらのことから、2 歳魚主体で期を通じて近年の主漁場である三宅島周辺海域を中心に漁場が形成される。

2 経過と現況 (2008 年 7 月以降)

(1) 海況

黒潮は、5 月以降、C 型流路で推移した (ただし、その間数個の小蛇行が通過して C 型流路が維持されていた)。

9～10 月、伊豆諸島南部海域の冷水域が東へ移動し、伊豆諸島の東で急に蛇行する流路となった。

11 月、C 型流路の蛇行規模が拡大した。

年末から、黒潮の北上部が大きく蛇行して、青ヶ島南をいったん東方に抜け、再度勝浦沖で折り返して、房総半島に接岸して北東方向に流去する形となっている。

野島沖では、C 型流路の蛇行部の規模が大きくなった 8 月と 12 月に著しく接岸していた。とくに、12 月は房総半島にきわめて接岸し、房総沖に強烈な潮目が形成され、サバ、イワシなどの漁場が形成された。

伊豆諸島北部では、現在暖水の波及がみられる。

(2) 漁況

(ア) 秋季まき網漁業 ※年齢は 2008 年、魚体の大きさは尾叉長

北部まき網による 7～12 月までのサバ類水揚量は 144,045 トン (昨年同期: 122,334 トン) であった。そのうち銚子港における水揚量は 74,420 トン (昨年同期: 39,445 トン) であった。

7 月は、犬吠埼沖を主漁場に操業が見られた。8 月はマサバの北上にともない常磐北部～三陸北部海域で漁場は形成され、下旬までは主に常磐北部海域が主漁場となっていた。8 月末からは常磐北部海域での漁獲量は少なくなり、主漁場は三陸南部～北部海域へと移動し、9 月末

まで継続した。10月は、主漁場は三陸北部海域および常磐北部海域の2つの海域に分かれ、三陸北部海域の漁場は11月末まで継続した。常磐北部海域の漁場は、11月中旬以降マサバの南下に伴い徐々に常磐北部～南部海域に広がり、下旬には鹿島灘でも操業が見られるようになり、12月中旬まで継続した。12月中旬以降は鹿島灘～犬吠埼沖が主漁場となった。

銚子漁港に水揚げされたマサバ・ゴマサバの混獲割合は、マサバは8月に47%まで減少したが、その後徐々に増加し12月は91%となった。

銚子漁港に水揚げされたマサバの魚体は、7～8月は24～32cm（モード26、28cm）の1歳魚主体に34～38cm（モード36cm）の4歳魚が混じった。9月はモード30cmと37cmの2峰型となり、1、4歳魚が漁獲の主体となった。10月は9月と同じくモード30cmと37cmの2峰型となったが、9月に比べ1歳魚の割合は減少した。11月は27～33cm（モード29cm）の1歳魚主体に変わり、0歳魚がわずかに混じるようになった。12月は22～40cm（モード31cm）の1歳魚主体に再び大型魚が混じるようになった。

ゴマサバ魚体は、7月は24～30cm（モード25cm）の1歳魚主体に31～37cm（モード34cm）の4歳魚が混じった。8月は7月とは逆に30～37cm（モード33cm）の4歳魚主体に23～29cm（モード26cm）の1歳魚が混じるようになった。9月はモード29cmと35cmの2峰型となった。10～11月は28～35cm（モード31cm）の1歳魚主体に変わり、11月は0歳魚がわずかに混じるようになった。12月は1歳魚主体に再び大型魚が混じるようになった。

（イ）さんま棒受網による混獲情報

千葉県水産総合研究センターの調査船房総丸が8～11月に道東沖～鹿島沿岸で行ったさんま棒受網による漁場調査において、サバ類の混獲が見られた（下表）。

マサバ1歳魚（2007年級群）と思われる魚体の混獲が特徴であった。

調査回次	漁獲日	漁獲位置	尾数	魚種	魚体	水温(℃)
1-7	9月4日 釧路沖	41° 56' N	16	マサバ	19～26cm(モード21cm)	17.6
		143° 39' E	4	ゴマサバ	21cm	
1-8	9月7日 襟裳S60	40° 57' N	9	マサバ	20～34cm(モード29cm)	18.9
		143° 17' E	2	ゴマサバ	27～28cm	
1-9	9月10日 襟裳S40	41° 18' N	105	マサバ	27～38cm(モード29cm)	18.8
		143° 26' E	2	ゴマサバ	27～29cm	

（ウ）沿岸さば釣り

神奈川県主要3港（松輪、三崎、長井）における2008年7～12月のビシ釣り（通称かかりさば）、ハイカラ釣りによるマサバ水揚げ量は300,716kgと、前年同時期（578,591kg）を下回った。一方、ゴマサバは101,264kgと前年（50,233kg）を上回った。

2008年に伊豆諸島北部海域へ来遊したマサバ2004年級群は、伊豆諸島海域でたもすくい網によるマサバ主体の漁場形成をもたらしたが、漁獲量は好漁の昨年の1/4程度であり、来遊量は少なかったと見られる。5月下旬にサバ釣りによるマサバの漁獲が急増したが、このタイミングは、黒潮流路変動に伴う伊豆諸島北部海域への暖水波及によって索餌北上が促された時期と一致する。漁獲のピークは6、7月にあり、単価が上がる8月以降の漁獲は少なくなった。また、ゴマサバは低調だった昨年を上回る漁獲となった。三崎船を中心とする夜間の立縄漁、長井船によるハイカラ釣りのマサバを対象とする出漁は12月に若干増えたものの少ない。

みうら漁協松輪支所所属船の各月のマサバ CPUE は、5 月 299.3kg (昨年同月 63.6kg)、6 月 205.4kg (257.7kg)、7 月 206.4kg (422.5kg)、8 月 112.2kg (133.1kg)、9 月 105.8kg (232.8kg)、10 月 79.6kg (106.1kg)、11 月 89.2kg (71.9kg) と、漁期前半に好漁があった。松輪支所で水揚げされたマサバの銘柄組成では、漁期はじめから 7 月までの好漁時は「特大」(600～750 g)と「丸特」(750g～)の割合が高く、量が少なくなった 8 月以降は「大」(450～600 g)「中」(300～450 g)の割合が高まった。体重と尾叉長の関係から推定した「中」の尾叉長範囲は～32.5 cm、「大」(450～600 g)は 32.5～35.6、「特大」は 35.6～38.2、「丸特」(750 g～)は 38.2 cm～、であり、7 月までは伊豆諸島からの北上群の一部、2004 年級群主体に 2005 年級群混じりの魚群が対象となり、その後、やや小型の群が来遊した可能性がある。

(エ) 定置網

外房沿岸の定置網では 12 月中旬からマサバ・ゴマサバの入網が見られるようになり、下旬にはマサバ大・中型魚の割合が増加した。魚体は、マサバ 30～41cm (モード 33、38、39cm)、ゴマサバ 27～34cm (モード 30cm)であった。

相模湾東部の大型定置網 5ヶ統(三崎、長井水揚げ)による 2008 年 7～12 月のサバ類水揚げ量は、マサバは 320,085kg (前年同期 253,783kg)と前年を上回る好漁となったが、ゴマサバは 86,416kg (74,070kg)と前年をやや上回ったものの低調が続いた。

1 月～11 月では、マサバは沿岸さば釣と同様に 5 月下旬以降、漁獲が急増し、7 月に大漁となった。11 月に下火となった。5～7 月は 36～37 cm モードの 2004 年級群の入網が多かった。ゴマサバも 7 月に若干入網が増えたものの昨年に引き続き低調となった。

(オ) 静岡県棒受網

2008 年 7～11 月の静岡県内主要 4 港(伊東、静浦、沼津、小川)における棒受網・たもすくいによるサバ類の水揚量は、マサバが 0.0 トン(前年同期 1.7 トン)、ゴマサバは 5,655.7 トンで前年同期(3,480.9 トン)の 162%であった。同じく 7～11 月の主要 4 港における全漁法(棒受網・たもすくい、まき網、定置網)によるサバ類の水揚量は、マサバが 44.7 トンで前年同期(80.1 トン)の 56%、ゴマサバは 17,119.3 トンで前年同期(14,854.7 トン)の 115%となっている。

ゴマサバについて 7～12 月の小川港における棒受網(一部たもすくいを含む)の 1 夜 1 隻あたり水揚量をみると、月毎に 34.8 トン、37.6 トン、34.0 トン、36.9 トン、34.8 トン、37.9 トンで、好調であった前年同期(17.8 トン、15.4 トン、32.0 トン、31.7 トン、30.0 トン、31.3 トン)をさらに上回って経過した。

棒受網の漁場は、7～12 月を通じて三宅、三本など三宅島周辺海域に形成された。7 月上旬には、銭洲への出漁も見られた。

棒受網で漁獲されたゴマサバの体長範囲は 24～43cm であったが、8 月以降 30cm 以上の割合が少なくなり小型魚主体となった。すなわち、7 月の体長モードは 28cm、33cm に見られたが 8 月は 26cm モードの単峰となり、9 月は 28cm モード、10 月は 27cm モード、11 月は 28、30cm モード、12 月は 29cm モードと経過した。年齢査定の結果、漁獲対象群の多くは 1 歳魚(2007 年級群)であり 2 歳魚(2006 年級群)、3 歳魚(2005 年級群)が混じった。なお、昨年は 8 月以降に 0 歳魚(2007 年級群)が出現し 10 月以降に漁獲の主対象となっ

たが、2008 年は 11 月の体長測定で 21～22cm の 0 歳魚（2008 年級群）と思われる個体を確認したのみで、年齢査定でも 0 歳魚の出現割合は少なかった。

2009 年の棒受網船の出漁は 1 月 7 日以降となるため、現在のところ新たな情報はない。

（カ） たもすくい

神奈川県主要 2 港（長井・三崎）における 2008 年 7～12 月のたもすくい漁業による水揚げ量は、マサバは 0 トン（前年同期 1.6 トン）、ゴマサバは 385 トン（前年同期 254 トン）となった。6 月から 8 月下旬にかけては大型船が 1 隻、沿岸さば釣に切り替えている。中型船はキンメダイ、ムツといった底物漁に適する海況となったため漁獲対象を変えた。8 月下旬以降は大型船 1 隻のみが三本を含む三宅島周辺海域へ出漁し、尾叉長 27～30 cm にモードがあるゴマサバを漁獲した。棒受網での漁獲物と同様、2007 年級群主体と見られる。この間の CPUE は約 9.8 トンと少なく、燃油の高騰も影響し漂泊を挟んで二晩の操業後、水揚する場合が多かった。マサバの漁獲は皆無だった。

3 漁期前調査結果

（ア） 千葉県（房総丸）

①12 月 12～13 日に勝浦沖～鹿島灘（21.4～22.3℃）にかけてサバ魚群探索および漁獲調査を実施した。

勝浦沖（水深 120～175m）と底に幕状の薄い反応があり、ハイカラによりマサバ 13 尾（29～33cm モード 31cm）ゴマサバ 48 尾（26～34cm モード 30cm）を釣獲した。

②12 月 15 日に鴨川沖～勝浦沖（20.4～21.7℃）にかけてサバ魚群探索および漁獲調査を実施した。

鴨川沖～勝浦沖（水深 20～170m）に幕状の薄い反応があり、ハイカラによりマサバ 37 尾（24～34cm モード 30, 31cm）ゴマサバ 71 尾（22～33cm モード 25, 28cm）を釣獲した。

③12 月 17～19 日に野島沖（21.5℃）でサバ魚群探索および漁獲調査を実施した。

野島沖（水深 20～50m）に幕状の反応があり、ハイカラによりゴマサバ 11 尾（25～30cm モード 28cm）を釣獲した。マサバの漁獲は無かった。

④1 月 7～8 日に大室出し（17.1℃）でサバ魚群探索および漁獲調査を実施した。

大室出し（水深 79m）に点・幕状の淡い反応があり、たもすくいによりゴマサバ約 4t（29～37cm モード 31cm）を釣獲した。マサバの漁獲は 2 尾（36、37cm）であった。